生徒を見取って授業をデザイン
教科でキャリア教育
田名部高校（青森・県立）

第23回
英語

英語4技能を「遊ぶように学ぶ授業」で育む 建設的・批判的思考力や意見を戦わせる力

生徒がアウトプットする時間を増やしたいが、受験に備えて教科書の内容をきちんとインプットする時間も確保したい。どの教科にも通じるこの問題を「学んだことを使って定着させる授業」で乗り越えてきた実践をご紹介します。

取材・文／松井大助
撮影／坂本孝也

英語
堤 孝先生

教師を志望した当初の目標は「探検部を立ち上げて破天荒な生徒を育てること」だったそう。アメリカの大学院で英語教授法を学び修士号取得。田名部高校で同僚と授業の型となるTANABU Modelを構築。教師の負担を減らせて、誰もができるような授業モデルへの進化を目指している。

正解がわかるまで発言せず 従順なことが良いことなのか

田名部高校は、青森県下北半島にある進学校。地元の中学生の多くが目指す学校で、学力的にはそれなりに幅広い層の生徒がいる。その生徒たちの魅力として堤先生が感じているのは、素直さだという。

「本当に性格がいいんですね。実は私も田名部高校出身なのですが、自分の時代では考えられないほど（笑）」

ただ、その良さがときに「従順さ」につながっていないか、とも感じている。生徒たちは、正解を見つけるまでなかなか意見を口にしない。発言しても、相手の気持ちを汲んだ意見を述べようとする。

「私は、それじゃあ嫌なんですよ。どんな時代がくるかわからないのだから、我々の言うことを鵜呑みにしないでほしい。『先生はそう言うが、自分はこう思う』と言えるようになってほしいのです」

要はクリティカル・シンキング（批判的思考）を身に付けてほしいということ。でもそれは「人格批判」をすることではない。だから堤先生は造語として「建設的・批判的思考力を伸ばしたい」と語る。

「自分と違う考えを尊重しながら、自分の意見を述べられるかっこいい人間になってほしいと生徒に伝えています。たとえ相手が気に入らなくても、『人』を攻撃するのではなく『意見』を戦わせて、建設的な考えを生み出してほしいのです」

英語教師として思い描く生徒の未来像もある。「世界中の人々と一緒に、地球上のどこかで英語を使っている」姿だ。

「しばらく英語から離れても必要なときに英語を思い出せる。そんな感覚を生徒に残せたら本望ですね。知識として覚えた英語ではなく、読んで聞いて書いて話してて、何度も使って技能として身に付けた英語なら、よりどころとなる感覚は残ると思うのです。一度泳ぐことを覚えれば、何年ブランクがあっても泳げるように」

そんな思いがあるだけに、堤先生が目指す授業の方向性ははっきりしている。生徒が英語を使って自分の考えを表現し、意見も戦わせるコミュニカティブな授業だ。

図1 TANABU Modelの4パターン

パターン名【コース名】	授業の流れ	時間数 / Lesson
パターンA【超こってり】15時間 “パフォーマンス”	概要把握→詳細理解→語彙＆表現定着活動→様々な音読活動→“パフォーマンス”テスト（1年ロールプレイ・2年ディベート・3年パネルディスカッション）	15時間
パターンB【こってり】10時間 “リプロダクション”	概要把握→詳細理解→語彙＆表現定着活動→様々な音読活動→ディクテーション→ストーリー “リプロダクション”	10時間
パターンC【あっさり】4時間 “リスニング”	“リスニング”による概要把握→語彙＆表現定着活動→様々な音読活動	4時間
パターンD【超あっさり】2時間 “読解力”	“読解力”診断テスト→語彙＆表現定着活動→様々な音読活動	2時間

全単元の「内容理解」と「表現活動」を両立させるには

しかし、生徒が自分の考えを表現するアウトプットの時間を増やすとなると、教科書の全単元の語彙や文法を覚えるインプットの時間は、どう確保するのか。

その両立のために、コミュニケーション英語の授業モデルとして、堤先生が同僚と築いたのが〝TANABU Model〟だ。図1のように、授業の流れを4パターン構築。単元によっては、リスニングや読解力テストに絞って「あっさり」短時間で授業できるようにして、ひねりだした時間を表現活動に回し、そのなかで「英語を使って定着させる」ことも目指したのだ。

時間をかけて「こってり」やる単元の場合、授業の流れはこんな感じだ。

まずは概要把握。生徒は予習段階で、辞書を極力使わずに〝PARAGRAPH CHART〟(本文の展開を図式化して空欄を設けたシート)や〝SUMMARY〟(概要を日本語100字でまとめる)に取り組み、その内容を授業でペアや全体で確認する。

「これはいい読み手になるための〝推測ゲーム〟なんです。本文やタイトル、写真から内容を推測し、仮説を立てて読む。推測で100字にまとめた概要をペアで『ここはどう?』と確認し合うと、読みの甘さや間違いが自然にわかります」

次いで詳細理解。これも各自ワークシートに挑んでからペアや全体で確認する。

続いて語彙&表現定着活動と音読活動。〝VOCABULARY SCANNING〟では、与えられた日本語と指定語数に当てはまる英語表現を教科書から抜き出す。英単語がわからなくても推測で考えられるのだ。ペアで答え合わせをしたら、覚えた表現について問題の出し合いっこ。

〝READING PRACTICE〟では多種多様な音読練習にチャレンジ。最速読みの競い合い、超早口から超ゆっくりまで緩急つけたクレイジー・リーディング、先生が言葉を発したらすぐ追いかけてほぼ同時に音読するシャドウイング、耳にした英語をその場で訳す同時通訳など。

「これをALT(外国語指導助手)がやるとすごく面白いですよ。ネイティブのスピーチを、生徒は何を言っているかわからなくても、のりでリピートします(笑)。英語の発音やリズムに慣れていきます」

教科書本文の朗読を生徒が聞きながら〝DICTATION〟(書き取り)もして、締めには〝STORY REPRODUCTION〟を行う。与えられた10個のキーワードを使い、各生徒が、本文の内容を自分なりの英語で、話して書いて、表現するのだ。

「超こってり」パターンでは、その後にパフォーマンス・テストを行う。1年生は教科書の登場人物なりきりインタビュー。うまく演じたい生徒ほど教科書を読み込む。2年生は教科書の内容を基にしたディベートで、お題は「国境なき医師団の医師が子どもの酸素ボンベを外した決断は正しいか」など。余り時間に「首相はUFOの存在を公表すべきか」を議論したことも。「ニュースを疑え、教科書を疑え、先生を疑え」とも投げかける。

総じて茶目っ気のある授業内容だが、これも堤先生が大事にしていることだ。

「生徒の頭を桶に突っ込んで水を飲ませるような授業ではなく、『英語ってなんかおもしれえ』と、生徒が水を飲みたくて飲みにくるような授業にしたいんです」

個別ワークで取り組んだことをペアや全体で確認するときは、堤先生は指示を出すだけで、正解や間違いは生徒が見つける。「私の役目は教師というよりコーチ」と堤先生。

ALTが見本を示したクレイジー・リーディングでは、言い方を大げさなほど真似て周囲の笑いを誘う生徒も。「間違えたら恥ずかしい」とはならず、皆で音読を楽しんでいた。

INTERVIEW

生徒が外に出ても自分を発揮できるように

英語
武川真樹先生

TANABU Modelをつくるために、堤先生とまず取り組んだのは、全国の先進的な高校に学び、真似から入って本校に合わせて調整することでした。

そうした形づくった型を、堤先生が新課程の1年生から導入。そのとき私は3年生の受け持ちで、2年間は傍から見ていたのですが、授業中の生徒は楽しそうでも「説明不足では?」とも感じていました。けれども、その1年生が卒業までに、模試の成績でも飛躍的な伸びをみせてくれたのです。以降も、異動で来られた先生方がこの授業モデルをうまく自分のスタイルに落とし込んでくれて、毎年結果もついてきて、皆で手応えを深めていきました。

英語を抵抗なく使うfluency(流暢さ)を重視した授業なので、当初は文法などのaccuracy(正確性)は低くなりやすい、といった課題はありました。そうした点は、先生同士で意見を出し合い、例えばaccuracyは課題や小テストで補うなど、授業のやり方を少しずつモデルチェンジしていきました。今後も皆で改善をしながら、より実践しやすいTANABU Modelにしていきたいです。

本校の生徒は、地元の人以外との接点はそんなに多くないこともあり、力はあっても引っ込み思案なところがあるんですね。私たちとしては、その子たちが外に出ても、自分の良さを発揮して活躍できるようになってほしいんです。そして外でもいろいろなものを見聞きしてさらに成長し、得たもので還元できるものがあれば、社会やこの地域に還元してもらえたら、と思っています。

田名部高校(青森・県立)

School Data

普通科・英語科/1917年創立
生徒数(2017年度)　556人(男子229人・女子327人)
進路状況(2016年度実績)
大学135人・短大12人・専門学校/各種学校24人
就職12人・その他7人
〒035-0054　青森県むつ市海老川町6-18
TEL 0175-22-1184
URL http://www.tanabu-h.asn.ed.jp/

Outline

校訓は、「自律・協和・純正」。校章は、ドイツの物理学者ラウエが発見したラウエ・スポット(ラウエ斑点)を形どったもの。その整った美しさに通じるように「調和のとれた人間の育成」を目指している。生徒主体の学習活動に力を入れており、部活動も盛ん。アメリカ・ワシントン州にあるポートエシジェルス高校が姉妹校で、英語科ではその姉妹校交流をはじめ、さまざまな国際交流活動も行っている。

田名部高校　英語十箇条

一．自分の弱点を見つけ自分で学ぶことができる
　　自立したかっこいい人間になるべし
二．国際的な広い視野で物事をとらえ、
　　できることから行動できるかっこいい人間になるべし
三．映画や音楽、テレビ番組など
　　身の周りにあふれている英語に積極的に触れるべし
四．8年後には世界の人々と一緒に、
　　地球のどこかで英語を使って仕事をしていることを肝に銘ずるべし
五．自分と違う考えを尊重しながら、
　　自分の意見を述べられるかっこいい人間になるべし
六．たとえ親の敵とペアになっても、
　　クールにかっこよく協力して活動に取り組むべし
七．チャイムとともに授業を始められるように、万全の準備をしておくべし
八．釜臥山が噴火しても提出物の期限を厳守するべし
九．自分の努力できる才能を信じるべし
十．豊かな想像力&創造力と適切なユーモアを持つべし

堤先生が作成して田名部高校の新1年生に毎年配っている十箇条。ユーモアを交えながら生徒に身に付けてほしい心がまえを示している

HINT&TIPS

1 英語を使うなかでの文法や語彙の定着を中学校で学んできたことも含めて狙う

堤先生の授業では、英語を読む・聞く・書く・話すことのトライアル&エラーを生徒がくり返して、中学校レベルからの文法や語彙の定着を図っていく。語学教育会社の調査によれば、大学受験の79％は（語彙がわかっていれば）中学校までの文法で解けたそうで、基礎の定着は受験対策にも有効なのだ。

2 教師による添削は最小限にとどめて正解や間違いは生徒が自分で見つける

ワークシートの記述はペアと全体で確認するが、正解や間違いの発見は基本、生徒任せ。自分の英語で表現するSTORY REPRODUCTIONでも、生徒が下線を引いて添削を求めたところだけ堤先生がチェック。先生に直されて気落ちする場面を極力減らし、生徒が委縮せずに英語を使えるようにしている。

3 既存テキストの書き出しや音読だけでなく自分の考えを書く・話す機会も大事にする

以前にやったCNNの教材活用や生徒がキャスター役になる授業について、堤先生は今ではまだ足りない部分があった、と感じている。あくまでも既存テキストをなぞって記述や発声をする活動だからだ。現在はそれだけにとどめず、「自分の考えを英語で話す・書く」という機会を増やしている。

4 生徒も教師も慣れから成長を止めないよう授業モデルは常に進化・変化を目指す

型のあるTANABU Modelの構築で、生徒は先を見通せる安心感を得られ、教員は授業準備の負担を減らせた。だが授業が硬直化すると、生徒は変化に対応できなくなり、各先生は窮屈さも感じる。だから授業モデルは「振り返ってみたら原型がない」のが理想とし、毎年、教員同士で話し合い進化させている。

授業ができるまで

生徒の英語が伸びたと思えず自分はニセモノだと苦悩した

「英語教員は、英語という『自分もよくわかっていないもの』を扱っている、という苦しみを抱えていると思うんです」

堤先生が授業研究をするのは、その苦しみを少しでも減らしたいからだという。その思いは生徒にも率直に伝えている。

「黒板全体が英語の世界だとしたら、自分が知っているのはチョークのこの点にも満たないよ、と。自分は英語がわからない。わからないけれども精一杯がんばる、という話は生徒にも必ずします」

実際、堤先生はこれまでに何度も「英語がわからない」感覚を味わってきた。

もとは理系。夢だったパイロットを視力低下で断念し、世界を巡るジャーナリストに興味をもったので、高校では得意ではなかった英語もがんばった。そうして大学の外国語学部に進学するも、周囲は帰国子女だらけ。語学力の差を思い知る。

教員としての初任校は農業高校。中学英語で躓いている生徒が多く、学び直しを図るが、定着しない。「できなかったことを反復させるだけでは通用しない」「英語の教え方がわからない」と苦悩した。

二校目は進学校。教え方に自信はなく、「授業では学生時代の探検部の話ばかりした気がします。ただ、なぜか生徒の模試の結果や進学実績は上がったんですね。私の適当さに生徒が危機感をもち、本当に自分たちでがんばってくれたんです」

三校目は英語科のあった受験校。CNNの番組を新鮮な教材として活用したり、生徒がキャスター役で英文を読んだりと、さまざまな授業に挑戦した。生徒の反応も悪くなく、模試や受験では成果も出た。

でも堤先生の心境は複雑だった。受験英語を乗り切った自分自身、以降も英語を苦手にしているわけで、本当に「生徒の英語を伸ばせた」とは思えなかったのだ。

「伸びるからがんばれ、と生徒に言っているくせに、伸ばせていない。自分はニセモノだとすごく感じて、このまま教師を続けるのが耐えられなくなりました」

だから、旅で魅了された米バーモント州に渡ろうと決め、現地の大学院を受験。校長に辞意を伝えた。すると校長は無給になるが休業して海外で学べる制度を教えてくれ、その活用を薦めてくれた。

結局、教職のまま渡米。2年間、英語教授法や第二言語習得をむさぼるように学び、それを支えに、学校復帰を決めた。

「知りたいことを学んだので、めちゃめちゃ面白かったんです。自分もやれば勉強できるんだ、と初めて思いました」

帰国後は、他の先生と協働で授業改善にチャレンジ。そして4校目となる母校の田名部高校で、また得がたい機会に恵まれる。小中高連携授業のプロジェクトで、中学校の先生とも話し合うようになり、「中学校までに習った英語を『授業で使って定着させる』ことも高校の役割」と確信したのだ（HINT&TIPSも参照）。

翌2013年、田名部高校は指導改善の拠点校（※）に。同僚たちとTANABU Modelとなる授業づくりが始まった。

ワークシートの内容の全体確認の光景。まずは何人かの生徒が黒板に答えを書き、それを全員で確かめて、もし間違いがあれば生徒がまだ指摘する、という形で行う。あくまでも生徒主導だ。

※文部科学省『英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を改善する指導改善の取組』拠点校

生徒はこう変わる

英語を学ぶことを楽しみ、自己表現もできるように

知識の詰め込みではない、英語を使って定着させる授業への転換は、先生たちにも未知の挑戦で、これで十分かと悩みながらの試行錯誤が続いた。でも手応えもあった。授業中の生徒たちが、これまで以上に楽しそうで積極的だったからだ。

「このテーマで話してみようとふったら生徒同士がすぐ英語でしゃべりだしたり。この子たち、すげえって思いました。休み時間や部活動でも英語で掛け合いしているのを見たときは、嬉しかったですね」

気がかりは受験だったが、生徒たちは、1年生の秋から模試でも飛躍的な伸びを見せ、受験でも従来を上回る結果を出した。それはその学年限定の話ではなく、以降も続いた。TANABU Modelで3年間学んだ生徒が巣立つと、卒業生からも嬉しい報告が届く。「大学の英語の授業が楽勝です」というのだ。大学教授まで連絡をくれた。「田名部高校出身の学生は、大学での学びが早いようだ。授業で話すことを楽しんでいるように見える」と。

先生たちが手にした副産物もあった。英語の先生同士では、年3回学校で行う研究協議会の発表に向けて、コミュニカティブな授業を協働で行うことの課題や成果を共有しているのだが、そのなかである先生はこんな感想をシェアしている。

「学年で共通のワークシートを使用しているため（中略）授業準備が楽になった」「学年団で話し合う機会が増えたため、どの時点で生徒をどうもっていくかの共通理解ができた。同じ方向性で指導ができる」

TANABU Modelの成果は注目され、その授業や研究協議会には、全国から教育関係者が足を運ぶようになった。堤先生としてはそれがまた嬉しい。

「学校名を入れたモデルにしたのは、いろいろな人に本校の授業を見にきてもらいたい、という願いもあったからなんです。『この下北半島で学んでいることは、外からも注目されている』。生徒がそう感じることで、世界中の人々と渡り合っていくときの〝自信〟にもなってほしい。我々教員には、そんな思いもあったので」

■ INTERVIEW

遊びって言われるからやりたくなる

――堤先生の授業はどんな授業ですか？

「先生は海外にもいっぱい行っていて、アメリカ人のような英語のジョークをつくるんです。楽しいです」

「面白いよね。ペアで同時通訳みたいなことしたり、英文を自分の想像で日本語に変えてみたり」

「勉強だけど勉強っていう気がしない」

「たしかに。遊び感覚でやる授業」

「授業はすべて遊びだ、と先生も言っていて。普通の授業だと、ちょっとやりたくない、と思うんですけれど、遊びって言われると、やっぱりこっちもやりたくなるんですね。それで単語とか文法とかも覚えられたりして、すごい授業です」

1年1組の皆さん

素直さの上にしたたかな賢さを

私の担当教科は地理ですが、堤先生とは授業でコラボもしています。例えば、この地域の老人介護施設には、海外から実習生が働きにこられているので、その方々をお呼びし、異文化共生を考える授業をしました。

堤先生は、生徒を馬鹿にしない先生ですね。どの生徒にも学ぶ意欲があることを信じて、その子たちのプライドをどう育めばいいか考えています。その堤先生をはじめ、英語科の先生たちは、それぞれ自分なりの手法でやりたい気持ちもあっただろうに、「生徒たちが英語を使うことを楽しむ」という一点目指して、皆で議論してすり合わせ、TANABU Modelをつくりました。簡単なことではなく、すごいなと思うのです。

私自身はそんな先生方と、童話のなかで「王様は裸だよ」と叫んだ少年のような強さも生徒に育んでいけたら、と思っています。うちの生徒は本当に素直ですが、周囲を慮りすぎて言いたいことを言えないことがあるんですね。それがダメなわけではなく、常に積極的になれと求めたいわけでもありません。ただ大事なときは迎合せずに「それは違うよ」と言えるようになってほしい。聖書の「蛇のように賢く、鳩のように素直に」ではないですが、持ち前の素直さに賢明さが備われば、この子たちはきっとしたたかにこの時代を生きていけると思うのです。下北の宝ですから。この地域の宝を、私たちはあずかっているので。

教務主任
千葉栄美先生

授業で生徒に育みたい要素

	知識	能力	意欲・態度
育みたい要素	**中学・高校で習う文法や語彙** ・生徒が知識として覚えるのではなく、読む・聞く・話す・書くといったように「英語を使う」トライアル&エラーをくり返し、生徒同士で正解や間違いを見つけ合うなかで、文法や語彙を、自身の技能として定着させる。	**建設的・批判的思考力** **複眼的思考力** ・生徒が教科書の論調に反することを考えてみたり、異なる立場に分かれてディベートしたりと、物事をいろいろな角度から捉える。 **意見を戦わせる力** ・ペアやグループで、相手の意見を尊重しながら自分の意見を述べることに取り組む。	**「英語は楽しい」という感覚** **「英語を伸ばせた」という自信** ・英語を読む・聞く・話す・書くことを、生徒が授業中から遊ぶようにして楽しみ、その体験によって、英語を使えるという自信も育む。 ・学校外の人にも授業を見にきてもらい、生徒に「外からも注目されることを学んでいる」と感じさせて、それも自信につなげてもらう。
それが今・将来にどう生きる？	**受験や模試に強くなる** ・高校だけでなく中学校で習う文法や語彙も定着しやすくなり、試験問題が解きやすくなる。 **必要なときに英語を使える** ・頭の中の知識を組み立てて話そう・書こうとしてフリーズすることが減り、感覚的に身に付けた英語でより自由に表現できるようになる。	**世界中の人々と一緒に活動できる** ・どこで暮らすにしても異文化とも関わるのが当たり前になってきたこの時代に、異なる意見の人を排除せず、迎合もせず、お互いにどう共生・協働できるかを建設的に考えていける。 **時代の変化に対応できる** ・これまでの常識を鵜呑みにせず、よりよい発想や選択を皆で議論しながら考えていける。	**卒業したあとも英語を楽しく学べる** ・大学や職場で、英語を使いながら学ぶことへの抵抗がなく、4技能をさらに伸ばしていける。 **国際的に活躍できる人材になる** ・ローカルなところで学んできた、などと変に引け目を感じることなく、学んだことを生かして、日本全国はもちろん世界でも活躍していける。